

フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

人口減や高齢化の話題が多い中、久し振りに明るい話題が発信された。4月1日時点の総人口が、半年前に推計された人口より白馬村が174人増えたこと

の情報を。確かに観光産業を中心に多くの分野で労働力不足の声が聞かされてくる。私が暮らす白馬村森上地区は、静観な住宅街。数多くのアパートなどが点在しているが、区の組織には加入しない世帯が多かった。しかし、区の組織に加入して森上に生活の基盤を置くとする傾向がみられるようになった。春のお祭りも昨年以上に子どもたちの参加も多く、にぎわいが感じられた。

しかし、5月上旬に実施された「せぎ」普請は、1軒1人の要請での作業だが高齢者も多く、これからの公共施設の管理に不安を抱く状況だ。「せぎ」とは、甲州弁事典でも用水路や小川を「せぎ」と呼んでいるので、安曇野地域独特の方言ではないようだ。

安曇野地域は複合扇状地からできている。白馬の歩みによると、新田地区では、慶安4年に新田横せぎを

し、広範囲にわたって水を行き渡らせる「横せぎ」があるが白馬地域は、水温を高めるために「横せぎ」を取り入れられた。岳スキー場を横切っていて、スキー場開発時には、地中化のために多額の経費を投じてま

は、山腹を掘り、高低を測るために夜間にローソクを灯して決めたと非常に難工事でもあった。一部は、岩史を持つ「小川と共にある暮らし」への愛着なのだろう。古の人々の英知により築かれた資産を

便性を優先せず、縁石もガードレールも設けない昔ながらの美しい風景が保たれているのは、300年以上の歴史を持つ「小川と共にある暮らし」への愛着なのだろう。古の人々の英知により築かれた資産を

地域資源の成り立ちを知る事が大切だと考えてみませんか

域が多いため乏水地域が多く、水田の開発には向いていなかった。このため水田開発のため「せぎ」の開削を積極的に行った。「せぎ」は、傾斜を利用して水を流す「縦せぎ」、等高線とほぼ平行に水を流

造り、水田開発を行ったが、松川の水は冷たく冷害も多かったため、天保13年に楠川からの取水を計画、松本の藩の許可で着手できた歴史があり、また水の水温を高めるため全長3500以上に及ぶ工事

で「せぎ」を守った歴史は、岩岳地域の誇りなのだろう。現在では、岩岳地区は「白馬岩岳せせらぎの里」と謳われ、人工的に引水した流れにもかかわらず、地域の努力によって、生活の利

「せぎ」作業は、枯れ枝や落ち葉の除去が中心、高齢者には重労働だが地域を守る意識は皆高い



次の世代にも大切に引き継いでほしいと願っている。
(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)